

アダルト・チルドレン／共依存と工学教育

大 西 孝 臣*

Adalt Children / Co-dependency and technical education

Takaomi OHNISHI

Abstract

The effects of the two new concept appearances, Adalt Children and Co-dependency, on technical education are discussed in this article.

The author attempted to classify these concepts by using four key words, addiction, grief (or mourning)work by reason of object loss, Ajase complex and the new aspect of "YASASHISA".

1. はじめに

日本でもここ数年の間に“アダルト・チルドレン”そして“共依存”という言葉が市民権を得てきている。これら2つの言葉は“躁鬱・分裂症”という言葉が持つ意味合いほど深刻ではないが、“モラトリアム・三無主義”という言葉よりは具体的である。又、その発祥が伝統的な心理学や精神医学からではなく、アルコール依存症専門のカウンセラーやセラピストたちによる臨床の現場から生まれたという、ユニークな経緯も持っている。

本稿では、“アダルト・チルドレン”及び“共依存”の出現による工学生の資質の変化について、そして、われわれ工学を教える教師がなすべき方針について考える。

2. “アダルト・チルドレン”という用語

本章では、アダルト・チルドレンという概念の日本における研究の先駆者である斎藤¹⁾²⁾³⁾と信田⁴⁾の著書や西山⁵⁾⁶⁾のルポでの記述を中心に、“アダルト・チルドレン”という用語の発祥についてまとめる。

アダルト・チルドレン (Adalt Children = AC) という概念は、米国でのアルコール依存症の本人や家族をカウンセリングする現場から発生したもので、アダルト・チルドレン・オブ・アルコールックス (AC of Alcoholics = ACOA、アルコール依存症の親を持ち成長した大人) という

言葉が、ACの語源になっている。

アルコール依存者が激増する第1次大戦後の米国では、その治療方法の模索の過程で、アルコール依存は犯罪的非社会的な行為であり、依存者は犯罪者・欠陥者であるという旧来の認識から、アルコール依存はむしろ病気であり、依存者を病人とする認識へと視点の転換が起こった。

更に1940年代の後半から、アルコール依存者本人のみを対象とする治療や指導だけではアルコールへの依存を断つには効果が不十分であるという臨床経験から、アルコール問題は依存者の家族システムに問題があるという考え方が生まれ、1960年代終りか70年代から、アルコール依存者の家族（典型的には依存症の夫を持つ妻や子ども）に対する治療・観察・研究が行われるようになった。その過程で、依存者の家族の多くが持つ共通の病理として、依存者に対する自虐的ともいえる献身ぶりが注目されるようになった。アルコール依存者の妻は、家庭内での苦悩すべき立場の一方、その妻の座を降りることに考えを向けられない。又、その様な依存者の妻たちの多くが、同時にアルコール依存症の親を持つ娘でもあり、源家族において静かで控えめな「よい子」として、子どもながらも家庭を懸命に支えていたという経歴を持っていたという事実、すなわち、アルコール依存者を親に持つ子どもが大人になって、アルコール依存者（あるいはその予備軍）を配偶者として選択してしまうという傾向が見出された。

この様に、アルコール依存の問題の中に、アルコール依存者の配偶者や子どもが共通して持つ病理が問題の本質として潜んでいる事が認識され、アルコール依存者の配偶者が共通して持つ特有の

* 助 手 情報工学科

病理を共依存 (co-dependency) という形で表現し、アルコール依存者と共依存という病理を持つ配偶者を両親とする源家族で成長した大人に対して ACOA というキーワードを与えた。

更に、ACOA の定義と同じ頃の多くの事例として、父親から性的虐待を受けた娘が後に売春に走ったり、性犯罪を受けやすい状況に無意識に自らを追いやってしまう事が判明し、ACOA 以外にも家庭内での児童虐待の被害者が、後に自分の身を、心の傷を負った幼年期と同じ状況に再び置いてしまう傾向が見出された。つまり、アルコール依存以外の原因でも、幼年期に家庭において親からの何らかのトラウマ (trauma、アイデンティティを崩壊させる程の悲惨で非日常的な体験・攻撃による心の傷、心的外傷) を負い、そのまま成長した大人が ACOA に似た病理を持つという事が示された。

こうしてアルコール依存に由来する問題を抱える家族に限定されていた ACOA の概念は、薬物依存、ギャンブル依存、ワーカホリック (仕事依存)、暴力依存、家風への依存、宗教への嗜癖⁷⁾ (しへき、アディクション = addiction、悪習)、セックス嗜癖、消費嗜癖、「健康」への嗜癖等々に由来する問題を抱える源家族にて成長した大人にも適用される様になり、また、更なるケースとして、病気がちで入退院を繰り返す母親を持つ子どもや、甘やかし溺愛するだけで、適当な父権をもって子どもと接する事ができない父親を持つ子どもの様に、アルコール依存等の病的要素の有無と無関係に、家庭内での母親・父親としての役割が果たせない源家族での子どもが後に成長して大人になった場合にも ACOA と共通の病理が認められ、ACOA の概念は、アダルト・チルドレン・オブ・ディスファンクショナル・ファミリー (AC of Dysfunctional family = ACOD、機能不全家族において成長した大人) という形に発展した。

以上の様な過程を経て ACOA の概念が拡大し洗練された末、幼少期での源家族での親子関係において「安らぎ」を得ることができず (あるいは許されず)、大人に成長してからこの世での生きづらさ (不安や空虚感) を引きずっている“子どもたち”を総括して AC というキーワードで呼ぶ様になった。

日本においても、第2次大戦後に神奈川県国立療養所久里浜病院のアルコール専門病棟から本格的なアルコール依存者への“治療”が開始さ

れ、米国同様の治療方法の模索が行われた。1983年には、当時の同病院院長で、日本でのアルコール依存症や AC の研究の先駆者となる斎藤学氏が中心となって嗜癖問題研究所付属原宿相談室が開設され、嗜癖の問題としてのアルコール依存症の治療・研究や地域ケアの普及が進められた。そして治療の対象についても、依存者本人から配偶者、そして子どもである AC へと視野が広げられる様になった。

3. 嗜 癖

そもそも AC の概念はアルコール依存症の治療方法の模索を起源にして発見されているという経緯や、AC が、嗜癖を持つ親がいる源家族にて成長している例が多いという事からしても、嗜癖は AC の概念の背後に潜んでいる主要な問題と考えられる。又、AC が周りの社会や家族に対する生きづらさ (不安や空虚感) を打ち消す手段として嗜癖に走り、病的症状が現われたり、しばしば嗜癖が、同種あるいは異種の嗜癖として次世代に伝承する場合もある。

嗜癖とは、脅迫的に何かに執着してしまう状態であり、病的に至らぬものも含めば、主に若者が“ハマる”というキーワードで表現する状態である。緒方⁷⁾によれば、臨床の現場では嗜癖は「物質嗜癖」「過程嗜癖」「関係嗜癖」の3つの領域に分類できるという。

「物質嗜癖」：アルコール嗜癖、薬物嗜癖、ニコチン嗜癖、カフェイン嗜癖、摂食障害 (拒食症・過食症)

「過程嗜癖」：ギャンブル嗜癖、セックス嗜癖、ワーカホリック、エクササイズ嗜癖 (ランナーズ・ハイ等)、ケアテイキング嗜癖 (世話焼き嗜癖)、コントロール嗜癖 (支配嗜癖)、恋愛嗜癖、消費嗜癖、宗教嗜癖 (カルト嗜癖)

「関係嗜癖」：男女関係や親子関係に関わる嗜癖

上記でいう「関係嗜癖」での《男女関係や親子関係》に関わるとは、具体的には、恋人や配偶者に対する依存や攻撃、母子カプセル¹⁾・一卵性母娘³⁾やエディプス・コンプレックス⁹⁾、子どもに寄せる親の過剰な期待や親の子どもへの無関心等 (後に詳述する共依存も含まれる) であると考え

るが、ACの概念を説明する為には、「関係嗜癖」には、対人的な愛憎の他にも、アイデンティティ（社会的・歴史的自己）や身体的自己に関わる嗜癖（国民意識や民族意識、社会的地位・名誉・名声、家柄、富、知識、学歴、成績、容姿、生や若さや「健康」への執着、あるいは自殺やリストカットに代表される死や老いや病への執着）も加わるべきであろう。自己への執着は、自然原理や現実社会との客観的な関わりから離れ、主観的・幻想的なものへと肥大化する時に、自己中心的ナルシズムとなる。

4. アダルト・チルドレンと共依存

誰にとってもアイデンティティ（社会的・歴史的自己）を保持し続け、自己を確信する為に、自分是他者から必要とされ頼られ愛されているという、自己の存在を受動的に承認されたいという欲求を持っている。特に幼少期の子どもは、両親という愛情と依存の対象の存在が無い時に、大声で泣くという行動で周りの注意を引き付け、親に介抱させる事を繰り返して自己の存在を確認する。この自己の存在を承認されたいという欲望が満足されず、更に欲望を満足させていた愛情と依存の対象を喪失した事による《悲哀の過程》⁸⁾がうまく機能しない時、「人が自分を認めてくれなくとも、自分で自分を認めて生きる」という、《自己への再帰的な承認》¹¹⁾へと考え方を変更するか、あるいは「まず自分の方から相手の存在を認めて、相手からも自分の存在を認めてもらう。」という、《相手への能動的な承認というプロセスを経た上での自己への受動的な承認》¹¹⁾へと考え方を変更するようになる。

もし前者の《自己への再帰的な承認》が成功する場合、父性原理的な個が確立された欧米社会ではエディプス・コンプレックスを持つ身での生き抜く条件としての「自尊心」として確立するが、大平²⁾の著書から考えると、モノがあふれた消費社会（＝消費嗜癖社会）の中で育った現代の日本の若者にとっては、モノを媒体とした対人関係が主流になる為、自己の承認とは「何に“ハマって”いるのか」という主観的価値観となる。彼らはそのモノに関する主観的価値観を“個性”“ポリシー”“こだわり”というキーワードで装飾し、周囲に語りつづけ、“ポリシー”が他人に崩されぬ様にモノを周囲に並べ武装し、モノに囲まれた自分に陶醉する。

一方、機能不全家族という源家族に生まれ、育ち、親子関係において「安らぎ」を得る事が出来なかったACは、親からの愛情や依存を受けられず、自己を確信出来ない状況を「自分が“よい子”になれば」と自己に責任を向けて家族を支えようとしたり、親の愚痴を聞いてあげたり、勉強熱心になったりと、《自己への再帰的な承認》つまり家族の中の自己の役割分担を屈折した形（偽りの自己という形）で実現させる。従って、「安らぎ」を享受できるはずの幼少期の自己や愛情や依存の対象であった親の喪失に対する適切な《悲哀の過程》を果たせぬまま、ACは、癒されぬままの幼少期の自分（インナー・チャイルド）と、大人になった現在の自分にまだ住み着き、清算出来ずにいる内なる親（インナー・ペアレント⁴⁾）を“生きづらさ”のシンボルとして心に抱えている。

個人の内面に関する病理と捉えられるACに対し、共依存は対人関係の病理と捉えられるものであり、後者の《相手への能動的な承認というプロセスを経た上での自己への受動的な承認》という考え方を肥大化させたケースである。自分が愛情を向けて欲しい人から必要とされる為の手っ取り早い方法は、まず相手の世話をし、情緒的な支えになって、その人が自分無しではやっていけない所まで依頼心を持たせる事である。自分にとっては、大切な人から「あなたがいないと私は生きられない」と承認させる事で自己の確信を行なう。共依存にとっては、この“愛という名のもとに相手を支配する”過程に盲進し、この過程を成功させる努力を惜しまない。その結果相手は支配され、自立能力を削がれ、自己の確信が出来なくなる。

共依存という行為で相手に働きかけ「あなたがいないと私は生きられない」との承認を返してもらうという対人関係は、西欧社会での《息子が犯した罪を処罰する為の父親からの去勢の脅しに対する恐怖》をシンボルとする父性原理的な因果応報の確立を行動規範とするエディプス・コンプレックスではなく、従来の日本社会独特の《息子が犯した罪に対する母親からの無条件のゆるしや同情によって、息子の内面から起こる罪悪感》をシンボルとする母性原理的な“やさしさ”を行動規範とする阿闍世コンプレックス⁹⁾での親子観が適合する。従って、日本の家族制度における美德として考えられ、戦後の高度経済成長を支えてきた“良妻賢母”型の母親は共依存である場合が多

い。更に、妄信的な共依存の母親の場合、子どもが成長して子どもから手を放すべき時期になっても、愛玩の対象である子どもの喪失による《悲哀の過程》と取り組もうとしない為、“親の子離れ”を行わずに子どもを束縛し続けようとする。結局、子どもの将来に良かれと思って行なう共依存の母親の行為は、ACの子どもにとって“生きづらさ”を増大させる結果になる。

現代の日本の若者や若者社会は、親の共依存的な“やさしさ”に対抗して、新たな“やさしさ”観をもって強い防衛線を張る傾向にある。大平¹³⁾の著書から考えると、従来の日本人の母性原理的な概念である《相手の考え方を出来るだけ察し、相手に同情し、相手が苦慮する問題に積極的に関与し解決を助ける》という意味の“やさしさ”とは全く異なる《互いに干渉して相手の心の中に踏み込んだり自分の心の中に踏み込まれる事で“傷つけたり”“傷つく”事を絶対的なタブーとし、互いの“個性”“ポリシー”“プライバシー”を尊重しようとする》意味での“やさしさ”観が既に若者たちの共通感覚(暗黙知)として構築されている。この若者による新しい“やさしさ”は、従来の“やさしさ”観を持つ大人にとっては非常に消極的で屈折したものに映り、大人にとっては突飛で不可解にしか見えない若者の行動が、若者にとっては“やさしさ”の体系から導出された、「大人に対するせめてもの“やさしさ”」という当然の帰結である事が少なくない。

5. アダルト・チルドレンと工学教育

ACの学生は、源家族において自己の確信を屈折した手段で獲得しようとしても失敗し、今現在も「自分探し」を繰り返している。生来の才能さえ伴っていれば、ACの工学生の多くは勉強嗜癖による優等生であるといわれ、大抵は周囲に迷惑を掛けない物静かな学生である。この“優等生”になる事で自己の確信を得ようとするACの学生には、工学生であっても「自分探し」を繰り返している為に、自己分析に関わる意味での教養分野にも興味を持ち、極端な場合には、優秀な成績を持つ理工系の学生であるという自己を否定しようとしたりする場合がある。就職時期が近づいても、納得ゆくまでの「自分探し」が行われない内に“周囲からの要求”により人生の方向付けがなされる事を恐れ、学生の身分であり得る限りはモラトリアム¹⁰⁾の延長を図ろうとする傾向がある。

職場におけるこの種のACは、自己の確信に基づく確固たるNOが言えない為に、仕事を抱え込む傾向にあるが、幼少期に子どもの立場で源家族を支えてきたという経緯を抱えている為、支える対象を源家族から職場へと向ける様になり、職場の周囲を盛り立てる為の身を削る様な努力を惜しまない。

又、外部からの過度のポジティブ・シンキングを奨励される事により、前に進む事への脅迫観念を起こし、追い詰められるという、いわゆる“つんのめり症候群¹⁴⁾”と呼ばれる傾向も見られる。

ところがACの学生の一部、特に男性のACの中には、思春期を迎え、身体的な筋力も増強されてゆくことに伴って、幼少期の彼らを支配しトラウマを与える加害者である親の支配欲に同一化する様になり、かんしゃく発作や友人への暴力を働いたり“ごく普通の家庭で起こる”家庭内暴力の加害者となるといった、“物静かなAC”という例から外れる、暴力嗜癖を持つACの事例が報告されている。

女性のACの場合、その聡明さから、旧来の女性像は男性中心の家族制度的な教育によるものであると見抜き、共依存的な女性像には真っ向から対立する為、例えば「少女マンガ^{15) 16)}」の登場人物に同一化する等の我流のサイコドラマで自らを癒そうと試み、サブカルチャーへの嗜癖を持ったり、逆に女性性を自らの身体に刻み込む様にセックス嗜癖や薬物嗜癖に走ったり、アイデンティティを求めて新興宗教へと身を投じる宗教嗜癖に走ったりする例もある。

この様に、ACの工学生あるいは学生は、大人しい“優等生”が突然破綻したり、軽度なものの重度なものを含め嗜癖に走ったりと、外見上は理解し難い行動を起こす為、教師からは問題の本質が彼らの源家族との関係にある事は見えにくく、又、源家族の問題は、学校という組織からはほとんど干渉出来ない事が、更にこの種の問題を見えにくくしている。

今後対応が増えるであろうACの背景にある知識として、われわれ教師は、日本的ACを生む機能不全家族というものが、欧米での父親の身体的暴力がシンボルとなる様な印象、例えば暴力を起こすACの子どもの親が、以前その子どもに対して暴力によって支配してきたという家族像ではなく、「仕事嗜癖の父親+共依存(関係嗜癖)の母親+勉強嗜癖で物静かなACの子ども」をシンボルとした、むしろ戦後の高度経済成長期を支えてき

た“ごく普通の家庭像”に近いものである事を知らなければならない。

まかり間違っても教師はACの学生に対し「私は〇〇にハマっているから、あなたも行いなさい」といった価値観で、自らが持っている嗜癖を押し付けてはならない。ACの学生に「努力すれば、必ず報われる」という価値観を押しつけるのは、努力を惜しまないACの学生にとっては“つんのめり”のきっかけを与えてしまい、破綻を招く恐れがある。学生がACである事が判明しているのであれば、「現実社会はただ努力しても報われない場合だってある」「あるがままの自分を受け入れる」「ほどほどに生きる」事を勧め、学生の狭まった価値観をよりマルチなものに広げてやり、現実性のある将来を提示しなければならない。自己啓発の能力のある学生なら、人生の選択に折り合いを付ける術を身に付けるはずである。能力の無い学生なら、進路変更も含め、価値観・選択肢を教師が広げなければならない。工学生が人文系を指向する場合も、AC独特の「自分探し」の行動原理による、単なるモラトリアムの延長に過ぎないのではないか、“つんのめり”は起こさないのか、片寄りのない人文史観・社会史観等の人文系の学生が持つべき資質を有しているか等、教師が冷静にかつ広い視野から、学生の資質を見極め、指導しなければならない。

軽症のACの場合、学生がACという概念を誤解無く理解出来る様であれば、宣告する必要は無いにせよ、「手を伸ばせば本がある」環境位は提供すべきである。“AC”という用語は、「躁鬱・分裂症」の類の個人の精神病理を決定的に定義付ける用語でもなければ、「モラトリアム・三無主義」といった、世代の人間全てに適用出来る様な漠然とした抽象的な用語でもない。“AC”は特定の生育歴を持った人間に対し、自己啓発を動機付けるキーワードである。

重症のACに対する効果的な治療法とされているのは、自助グループ（セルフヘルプ・グループ）あるいはエンカウンター・グループ（出会いの場）等と呼ばれる治療グループに参加し、同様の機能不全家族である源家族からの影響を受けた仲間たちとの話し合いの中で、癒されなかった幼少時代（インナー・チャイルド）に対する《悲哀の過程》を果たし、心に住み着くインナー・ペアレントとの関係を清算し、真の自己を認知するという方法である。この様な治療の中では、インナー・ペアレントに対する葬式のサイコドラマを

行なったり、治療者が親代わりとなり患者を抱きしめる（ハグ）を行なう等、教師が学生に対して持てる人間関係を超越する親密性が要求される。又、治療に携わる専門の医師・セラピストは、ダイナミックに変貌する治療過程のACの心的状況を把握出来、ACが発するキーワードを誤解無く聞き取る能力を持っている。重症のACに対しては、学生とは不可避的な利害関係を持たざるを得ないわれわれ教師は無力である事を認め、適切な専門家に任せるという選択肢も考えてゆかなければならない。

技術者は、アイデアをひねり出す「柔軟」な部分と社会の存続・発展を支えるインフラを担うだけの理性やリアリティという「硬い」部分の双方を兼ね備えなければならない、当然の事として、オリジナリティを出すべき所と仰えるべき所を明確にわきまえられる事が最も基本的な素養として要求される。ACの出現により、産業界に人材を供給する立場としての教師は更に難しい状況に立たされるのは必定であるが、ACの学生本来の勤勉な性格を維持しつつ、体験を分かち合い共感する能力を育て、将来的には職場からや真の自分自身により存在の確信を維持することが出来るまでの技量を持った技術者に成長出来る様、手段を模索しなければならないと考える。

6. 共依存と工学教育

共依存は、周囲の世話を掛ける事を通じて自己の確信を得ようとする対人関係の病理である。従って外見上は従来の“やさしさ”観を持った人間であり、新しい“やさしさ”観を持っている若者にとっては古風な人であり、“うっとうしい”存在にも見えるが、当人には相手が自分に関心に向けてもらう事が全てである。共依存のほとんどの例が女性と言われており、特に若者を除いた日本女性の場合は、幼少期から家族制度的な教育によって、依存的で家族制度を指示する（“妻の座”¹¹⁾という形を重視する）事に価値を置く様に叩きこまれてしまっている為、大半が共依存になっていると考えられている。

学生として見た場合、その依存心が強い性格から、自立して社会に参加する事、自立したものとして期待される事を非常に恐れている場合が多い。自身に降りかかってくる問題の本質が自分自身の生育歴に関する所にあるにもかかわらず、周囲の面倒を調整する問題にすり替えてしまう。学

生時代には自分を「かわいい教え子」と称し、自己の印象を教師から聞き出そうとする事で自分の存在を確認する作業を繰り返す。「分からない箇所を質問する」と称して、一方的に教師から全ての解答を聞き出そうとする。又、卒業して次の進路に進んでも、特に会社の業務命令でなくとも、繰り返し母校に顔を出す傾向がある。

共依存の工学生は、工学の授業や、命令系統や協同作業のある職場の秩序の中で通常用いられる事務的な言葉遣い（オーダー用語³⁾）になじむ事が出来ず、よく家庭内で用いる「情緒言語³⁾」という言語形態で思考し、会話すると考えられ、授業で使用する工学的言葉遣いを理解出来ず、職場においては業務が円滑に進められず、周囲に迷惑を掛ける場合がある。

情緒言語とは、直感や相手の気配を察しながら使用する言語で、典型的な例では、言葉の話せない乳幼児やペットに対して話し掛ける言葉である。従って、年長の男性や育児経験の無い未婚男性のには他愛の無い情報に富んだ会話に聞こえ、意志の疎通が取れない事がある。

共依存の学生はよく教師に語るが、その語りかけてくる「他愛の無い」会話の中に、重大な自己に対する情緒的不安が吐露されている場合があるので、注意しなければならない。また、何が不安の原因であり、何が問題であるのかを学生にオーダー言語の使用を促す事で、明確にさせる訓練をさせなければならない。そもそもオーダー言語は、あるパターンに沿った言語形態である事から、情緒言語使用者がオーダー言語を使いこなす事自体は、その逆より容易である。共依存の学生に対しては、教師は、教師にとっては学校という組織は職場でもあるという姿勢を見せ、命令系統や共同作業の場面でオーダー言語を使用する状況を日頃から示さなければならない。

7. おわりに

本稿ではまず“アダルト・チルドレン”という概念が見出される過程を史実に従う形に述べ、「嗜癖」「対象の喪失に伴う悲哀の過程」「阿闍世コンプレックス」「新しい“やさしさ”の概念」を通して、アダルト・チルドレンと共依存の関係について言及した。更に学生、あるいは工学生としてのアダルト・チルドレンと共依存について考察した。

参考文献

- 1) 斎藤 学、家族依存症－仕事中毒から過食症まで－、誠信書房、1989
- 2) 斎藤 学、アダルト・チルドレンと家族－心のなかの子供を癒す－、学陽書房、1996
- 3) 斎藤 学、「家族」はこわい－母性化社会の父の役割－、日本経済新聞社、1997
- 4) 信田 さよ子、「アダルト・チルドレン」完全理解、三五館、1996
- 5) 西山 明、アダルト・チルドレン－自信はないけど、生きていく－、三五館、1995
- 6) 西山 明、ACからの手紙－私は青空が見たい－、三五館、1997
- 7) 緒方 明、アダルトチルドレンと共依存、誠信書房、1996
- 8) 小此木 啓吾、対象喪失、中公新書、1979
- 9) 小此木 啓吾、日本人の阿闍世コンプレックス、中公文庫、1982
- 10) 小此木 啓吾、モラトリアム人間を考える、ちくま学芸文庫、1985
- 11) 小此木 啓吾、自己愛人間、ちくま学芸文庫、1992
- 12) 大平 健、豊かさの精神病理、岩波新書、1990
- 13) 大平 健、やさしさの精神病理、岩波新書、1995
- 14) 高橋 龍太郎、あなたの心が壊れるとき、扶桑社、1997
- 15) 荷宮 和子、アダルトチルドレンと少女漫画、廣済堂出版、1997
- 16) 大塚 英志、システムと儀式、ちくま文庫、1992

(平成9年11月28日受理)